



読書感想文コンクール

**わたしの漱石、  
わたしの一行**

---

**中学生の部**

最優秀賞 .....	17
優秀賞 .....	18
朝日新聞社賞 .....	19
紀伊國屋書店賞 .....	21
新潮社賞 .....	22
早稲田大学賞 .....	24
佳作 .....	25

**高校生の部**

最優秀賞 .....	37
優秀賞 .....	38
朝日新聞社賞 .....	40
紀伊國屋書店賞 .....	41
新潮社賞 .....	43
早稲田大学賞 .....	44
佳作 .....	46



## わたしの漱石、わたしの一行

大妻中学校 1年

加藤 璃子

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

清はなんといいてもほめてくれる

周囲の大人や両親に言わせると、私はただいま反抗期真最中らしいです。確かに中学生になり、新しい環境、初めての体験、たくさんの新しい友達との出会いから、自分が今までどんなに小さく狭く制限された生活を送っていたかがわかってきました。それに伴い、大人、特に一番近い存在の両親に対して理不尽に感じるが増えたので、態度に出ているのだと思います。そんな私にとって坊っちゃんは、気持ちが良い痛快で、自分の思った事をズバリと言える所が魅力的な人物です。現実には私の身近に坊っちゃんがいたら、少々厄介者の困った人で、積極的に友達にはなれそうもありませんが、クラスメイトとしてはいてほしい気がします。学校でもどこでも、周囲

に合わせるか自分の意見を伝えるべきか、もし言ったら言ったで周りの反応がどうかなど、ベストは何なのか、注意を払う場面は多いですが、坊っちゃんだったらそんなことは思いつくこともなく堂々としているに違いありません。そんな坊っちゃんの自信がどう培われたのかが気になりました。そして読後に印象に残った一文が『清はなんといいてもほめてくれる』です。

以前から母の本棚にある子育て本を何冊かこっそり読んでいたのですが、そこには表現は様々ですが共通して「自己肯定感」について書かれています。母親を早く亡くしている坊ちゃんですが、兄とは仲が悪く、父親は坊ちゃんにはひどく冷淡で無関心な態度に終始しています。そのような家庭環境でも坊ちゃんが、おどおど他人の顔色を窺うような「うらなり」や、狡猾な「赤シャツ・野だいこ」のようにならず、変わりものではあっても正義感がありどこか憎めない人に成長したのには、清の存在が坊ちゃんの「自己肯定感」獲得にとっても大きくプラスに働いたからだと思います。清が坊ちゃんを『何といってもほめる』エピソードは日常の小さな出来事の描写で作中にいくつも出てきます。その中で私の好きな言葉は「あなたはまだすぐで、よいご気性だ。」です。ときには盲目的な清の言葉や態度に、坊っちゃんは素直に喜び照れますが、度が過ぎてはいまいかとあきれもします。が、そこには清への愛情や感謝、信頼が感じとれます。初めて坊っちゃんを読んだときは、赴任先の学校の生徒や癖のある同僚とのやり取りを面白く思っただけでしたが、今回

は、清と坊ちゃんの関係がとても興味深く、坊ちゃんの言動の奥に清を感じました。そして、ただ肯定しほめてくれる坊ちゃんの清をとてもうらやましいと思いました。私にとっての清は祖父でしたが、もう亡くなってしまったので、いつか期限付きでも構わないので『なんととってもほめてくれる清』を少し真似てくれないかと、両親に頼んでみようかと機会をうかがっています。

#### 審査講評

「自己肯定感」をキーワードにして、その在り様を中学生なりに捉えようとしている。自らを反抗期と認める爽やかさがあり、ユーモアを交えた視点のとり方が面白い。自分を客観視し相対化する距離の取り方が素晴らしい。結びまで自分に即しつつ上手くまとめられている。

#### 《中学生の部》

#### 優 秀 賞

#### 私の一行

新宿区立新宿西戸山中学校 2年

星野 光琉

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

己を知る事が出来さえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい  
敬を受けてよろしい

私に心響いた一行は、「吾輩は猫である」の、『己を知る事が出来さえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。』です。

私がこの一行を選んだ理由は、この一行は、主人公の「吾輩」が初めて人間を認めたところだからです。

この作品は「吾輩」が人間に棄てられるところから始まります。初めは人間に棄てられた影響で、人間の愚かさ、欲深さや文化を馬鹿にしていますが、人間と暮らすうちに、人間には悪いところだけではなく、尊重すべき良いところもあることを知り、次第に人間に

懂れていきます。その中で、今まで馬鹿にしていた人間を初めて認め、尊敬しはじめたのが、この一行なのです。

「吾輩」は猫なので、当然猫の視点で人間を見ています。人間にとっては当たり前のも、猫から見れば、人間のふるまいは愚かで、欲深く見えることもあるでしょう。この「猫の視点」で客観的に人間の世界を見ることで、普段は見えない人間の一面を描いているのがこの作品の大きな特徴だと思います。また、人間の生活、行動を見てきた「吾輩」が、この一行で『人間も人間として尊敬を受けてよろしい』と人間の文化、価値観を認めていることがわかります。つまり、この一行から、この作品は「人間の素晴らしさ」を描いている作品とも捉えることができます。

この一行は、ただ人間を肯定しているだけではなく、『己を知ることさえ出来れば』という条件も付いています。これは、こうなってくれば人間は素晴らしい存在になるという「吾輩」の考えですが、言い換えるとこれは筆者である夏目漱石の願いでもあると思います。漱石は、お互いが己を知り、尊重しあうことで、より素晴らしい人間になれると考えていたのではないのでしょうか。

実際、私の周りにいる人や、また私自身も己を知ろうとせず、立場をわきまえずに傲慢な立ち振る舞いをしてしまうことがあります。そんな時は、「吾輩」を思い出して、客観的に自分を見つめなおしたいと思いました。

この一行には、「吾輩」の考えの変化、私がこの作品のテーマだ

と考える「人間の素晴らしさ」、そして漱石のすべての人間への願いと、この物語の根本が詰まっていると思います。あまり目立たない地味な一行ではありますが、私はこの一行が大好きです。

#### 審査講評

論理は明確で説得力もある。気取ったところもなく等身大の感性で全体的に非常によくまとめられている。登場人物の思いや立場を客観的に自らに置き換え、考え方を導き出している。

#### 《中学生の部》

#### 朝日新聞社賞

「いない」けど「いる」ということ

千代田区立九段中等教育学校 1年

青葉 堇珠

作品名『猫の墓』

選んだ一行

萩の花の落ちこぼれた水の瀝りは、静かな夕暮の中に、  
幾度か愛子の小さい咽喉を潤おした。

「萩の花の落ちこぼれた水の瀝りは、静かな夕暮の中に、幾度か愛子の小さい咽喉を潤おした。」

この『猫の墓』の一行を読んだ時、愛子の猫の死に対する思いと私の祖母が亡くなった時の心情とが重なり合った。

『猫の墓』の中では、飼い猫の具合が悪いことに家族の誰も気に留めていなかったが、猫の死後急に家族皆が猫の事を想い始める。この一行は、萩の花やお水が供えられた猫の墓の前で、主人の娘の愛子が猫の茶碗の水をすくって飲んでいる様子を表している。愛子にとって猫は大切な存在であったのだ。

私にとっては、祖母が大切な存在であった。私は祖母に料理を教えてもらったり、絵と一緒にいかいたりして、よく一緒に時間を過ごしていた。ある日祖母が入院することになった。私は時間があればできるだけ祖母に会いに行った。この頃から祖母はよく窓の外を見つめるようになった。そして私に必ず「バランスのよい食事をとるんだよ」や、「家族を大切にするのよ」等の言葉をくれる様になった。私は「うん」と返事しながらも、何気なくその時間を過ごしてしまっていた。私にとって、祖母が私のそばにいてくれることや、笑顔でいてくれることが当たり前のように感じていたのである。『猫の墓』の家族も同じ気持ちだったのではないだろうか。

しかし、その日はある日突然やってきた。眠っているように動かない祖母を見た時に、祖母に伝えたい思いが沢山あふれ出てきた。

沢山の感謝の思い。伝えたい思いがぐるぐる自分の中をまわっていた。

矛盾しているが、祖母がもういないと思った時から、祖母のことを常に想う様になった。『猫の墓』の家族が、萩の花、水、鮭と鰹節を掛けた一杯の飯をお供えするように、自分も祖母の愛用のカップに水を入れて供えたり、祖母の好物を母と一緒に作り食卓に並べたりしている。私が選んだ一行にある愛子が墓の前にたたずんで猫の茶碗の水をすくって飲んでいる様子が、自分が祖母の写真を見ながら祖母のことを想う姿と合さるのである。

自分も『猫の墓』の家族も、大切な存在を失くし、そしてその存在の重さを感じているのだと思う。寂しくて心にぽっかりと空洞ができてしまった時は、家族と祖母の話をしたり、祖母との楽しい思い出を考えたりすることで、自分の中でまた祖母と一緒にいれるのである。

そして、祖母が私に伝えてくれた言葉は、愛子の咽喉を潤す水の瀝りの様に自分の中にしっかりとしみ込んでいる。私が選んだ一行は、失ってから改めてその存在の大切さに気づいたことが通じている。今日も私は祖母にお水を供え、お話をした。ここにいる誰かに伝えるだけでなく、ここにいない誰かにも自分の思いを伝える。その人のことを想いながら。

審査講評

愛子の猫の死に対する思いと、自らの祖母が亡くなった時の心情を重ね合わせて、失ってからその存在の大切さに気づくということへの考えを深めている。

《中学生の部》

紀伊國屋書店賞

言葉と感情

暁星中学校 1年

渡邊 佑理

作品名『夢十夜』

選んだ一行

すると、黒い眸の中に鮮に見えた自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。

夢十夜は「こんな夢を見た」という有名な文から始まります。この作品は第一夜から第十夜まで色々な夢に関する話がかかれていて短編集です。

「自分は只待っていると答えた。すると、黒い眸の中に鮮に見え

た自分の姿が、ぼうっと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱した様に、流れ出したと思ったら、女の眼がぱちりと閉じた。長い睫のあいだから涙が頬へ垂れた。――もう死んでいた。」

待つという約束に安心して眼に涙を浮かべつつ、意識が遠のきながら死んでいく彼女の様子が眸を池に見立てて表現されています。さらに、文章から涙の速度が伝わってきて、彼女の死にいく様と心情の移り変わりを感ずることが出来ます。「ぼうっと」にじみ出るように始まり「静かな水の動き」でゆっくりと流れ落ちていく。そして、閉じられた眼から頬へ流れる最後の一しずく。

この死は予想されていた死なのです。「もう死にます」と伝え本当に死にいく彼女を看取る恋人の夢の話です。血行も良く死にそうには見えませんが、主人公も「確かにこれは死ぬな」と思ったように「どうしても死ぬのか」と聞きます。この様な不可思議な場面から幻想的な結末へと展開していきます。

夢の中の話は断片的で唐突な事がよくあります。僕は、夢は人の感情によって異なるものになるのだと思います。僕にも、目覚めると「ああ、まだドキドキする」と呟きたくなる夢をみる事があります。そこで「第一夜」の夢の中を支配している感情は何かと考えるみると、それは主人公がこの女性を綺麗だと思ふ感情なのだと思います。この短い話の中の半分近くがこの女性の描写に使われていることから推測できます。「長い髪」、「輪郭の柔らかな瓜実顔」、「真白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、唇の色は無論赤い。

潤いのある真黒な眼は長い睫に包まれている。」これらの表現から女性への愛情やそこから生じる気持ちが強く伝わってくるように思えます。

僕を選んだ一行では、女性の死に際だというのに、顕微鏡を覗くように眸をみていることに驚きましたが、その後、彼女の「百年後に会いに来る」という言葉を信じて本当に百年も待ち続けることができたなんて、あの主人公の気持ちに嘘はなかったのだと感動しました。この眸と涙の部分は物語全体が悲しい雰囲気の中、直接的ではなく切なさを感じさせる表現であり、主人公の絶望・喪失感などあらゆる感情を一行に籠めた、凄い部分だと思ったのです。

#### 審査講評

人物の心情を夢の情景描写を通して生き生きと捉えている。ことばで体験したことを、やはりことばで表出できている。

#### 《中学生の部》

#### 新潮社賞

#### 先生へ

学習院女子中等科 2年

小澤 嘉織

#### 作品名『坊っちゃん』

#### 選んだ一行

てまえのわるいことは、わるかったといってしまうわらない  
うちは、罪は消えないもんだ。わるいことはてまえたち  
におぼえがあるだろう。ほんらいなら、ねてから後悔し  
て、あしたの朝でもあやまりにくるのがほんすじだ。

こちらは桜が咲き始めました。今年の桜は少し早く、丁度卒業式に合わせて咲き出した感じですよ。

先生、お元気でいらっしゃいますか。

僕は先生が僕らの中学に赴任された時、二年生で寄宿生でした。卒業の日、懐かしい寄宿舎を出る時、一番の思い出は先生でした。皆も同じだったようで、宿直室の前を通る時、あの窓を覗くようにしていました。

初めて先生を見た時、僕は嬉しくてたまりませんでした。先生の若さに僕はすっかり先生と自分自身を同化しました。僕らと同質の先生が教員室にいる、僕らと同質の先生が教室で教えてくれる、そう思うと学校生活が倍に楽しくなりました。そして先生から目が放せなくなりました。先生がてんぷらを食べた時も、だんごを食べた時も、温泉で泳いだ時も、それらは全部僕らもやっていることから、生徒全員で盛り上がりました。先生はすっかり僕らの兄貴というか、大将というか、そういう仲間に思えました。上級生が「とっかんをやるぞ」と言った時は本当に興奮しました。僕の父も卒業生です、とっかんは聞いたことがありました。とっかんは寄宿舎に昔から伝わるイベントで、代表生が実行を決めた時だけ特別にできるイベントです。マニュアルも歴代の代表生から伝えられています。皆で一丸となって夢中でやりました。しかし、その数日後の中学と師範のけんかはあれはぞっとする思い出です。何だか勢いが違う方向に行っていました。渦中にいながら、何をやっているのだろうと思いました。合図で逃げましたが、翌日には逃げた事を後悔しました。学校で新聞記事を読んだのです。僕は一層後悔しました。もっと詳しく言うと、愕然とした感じがしました。いかに自分が子供すぎたか、という事です。気分にもまれ、自分が楽しめるように物事を解釈してしまい、寄宿生の中の一人というくりに甘えていました。一人の生徒というか一人の人間として、正しく警察と新聞に抗議すべきでした。どんなに大変でも、記事にある間違いを、そ

して真実を胸を張って言い切るべきでした。僕は、とっかんの晩の先生の言葉を覚えています。「てまえの悪い事は、悪かったと言ってしまわないうちは、罪は消えないもんだ。悪い事は、てまえ達に覚えがあるだろう。本来なら寝てから後悔して、明日の朝でも謝りに来るのが本筋だ。」

四月から僕は一高に入学します。入学にあたって、一つ誓いをたてました。自分自身への挑戦です。―根性のないふぬけな人間になるな。罪に対して身勝手であるな。正しくいろ。―先生に誓います。先生、本当にありがとうございました。

#### 審査講評

固定概念を取り払い、自分の主張もある楽しい感想文。感想文を一通の手紙として成立させながら、その心情を深く考察して表現していることに脱帽する。

## 変わらないもの

新宿区立新宿中学校 3年

金 理宇

作品名『夢十夜』

選んだ一行

真白な百合が鼻の先で骨に徹える程匂った。

「真白な百合が鼻の先で骨に徹える程匂った。」この一行は「夢十夜」の「第一夜」にある。「第一夜」では、ある男が死ぬ寸前の女に「百年待っていて下さい」と頼まれ、日が落ちるのを数えながら、女がまた逢いに来るのを待つ。そうして長い間待っていると真白な百合が伸びてきて、男は百年が既に来ていたことを知るという内容だ。僕が選んだ一行は、この伸びてきた百合の描写である。

なぜこの一行を選んだのかというと、表現が深長だと思ったからだ。「骨に徹える程匂う」とはどのようなことなのだろう。また、なぜ「骨に徹える程匂った」のか。これらを考察していきたい。

まず、男と女の間柄について考えよう。女が男に自分の死を告白

する場面に「真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる」という一文がある。この文から女が男をしっかりと見つめていることが分かり、さらに単なる知り合いといった関係ではないことが想像できる。また、女が亡くなった後、土に埋める場面で「柔らかい土を、上からそっと掛けた」とある。このことから男が女に対して、丁寧に思いを込めて埋めていることが分かる。つまりこの二つのことから、おそらく男と女は互いに愛し合っていたのではないだろうか。

次に「百年待つ」ということについて考えよう。これは言うまでもなく、気が遠くなるくらい長い年月を待つということだ。作中には「苔の生えた丸い石」という描写もある。これもやはり長い年月を表している。

男と女の間柄と「百年待つ」という二つのポイントから、男は女を愛していて、もう一度逢うために長い年月を待とうと決意したのだろう。そうすると最初に述べた問いについて答えることができる。「骨に徹える程の匂い」というのは、男が百年を待っても嗅ぎたかった匂いである。そしてその匂いを嗅いだことで、「骨に徹える」つまり体の芯が揺れ動くほどの衝撃を受けたのではないだろうか。この表現には非常に感銘を受ける。さすがは夏目漱石、だてに千円札にはなっていない。

「百合」というのは「純潔」を意味する。途中で女に欺されたのではないかと疑うこともあったが、長い年月女に逢うために待ち続けた男は清らかであると思う。また、男の献身的な態度と、一途な

愛情には胸を打たれる。「変わらないもの」がそこにはあった。

百年愛する人を待つこと、それは僕にできるだろうか。口で言うことは簡単だけれど、実行することは難しい。おそらく、僕も途中でこの男のように疑うだろう。それでも、自分ではない誰かのことを長い間、強く想うということは素敵だ。僕はそれができる人間になりたい。

さて、こんなロマंचチックな夢を今夜見ないだろうか。

#### 審査講評

作品を鋭く読み解いており、テキストのイメージ的な構成を作品の具体的細部にとどまりながらストイックかつ論理的にたどろうとする、本格的読解となっている。

《中学生の部》

佳作

### わたしの一行

新宿区立牛込第二中学校 3年

中川 月香

作品名 『三四郎』

選んだ一行

「日本より頭の中のほうが広いでしょう。」

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より…頭の中のほうが広いでしょう。」聞きなじみのあるこの言葉は「三四郎」の序章で登場する。熊本から東京に向かう汽車の中で、ある男が三四郎に対して言った言葉だ。

正直私は、この言葉を「どこかで聞いたことがある」くらいに思っていて、その意味について深く考えたことはなかったのだが、この機会にかの有名なこの言葉と顔を合わせることになった。

漱石が「三四郎」を書いたのは、日本が日露戦争に勝利した明治のこと。日本中が戦争の勝利に夢中だった。私には、漱石がそんな浮足立つ日本に一喝したように感じた。さらに男はこう続ける。

「とらわれちゃだめだ。いくら日本のためを思ったて鼻眞の引き倒しになるばかりだ。」当時の日本と言えば、戦争だなんだと、考えることは日本と他国の事情ばかりだったことだろう。そんな社会全体の風潮に、漱石は一石を投じたのである。戦争真つただ中の状況下で、社会全体の動きを客観視していた漱石には驚きだ。また、男のこれらの言葉は、三四郎だけでなく、私の心も強く揺さぶった。

「日本より頭の中のほうが広い。」というこの言葉。漱石に探求心を持ち続ける、と言われていたようだ。そして、自分の頭の中には自分でも知らないような未知の世界が広がっているのだ、と。何かを知るためには好奇心や冒険心は必ず必要になってくる。踏みとどまっていたは、新しいことを知ることはできない。この言葉は、そんな飽くなき探求心を持つことの大切さを教えてくれた。そして、未来の可能性は計り知れないのだと、勇気づけてくれたようにも感じる。

また、「とらわれちゃだめだ。」という言葉にも、深く考えさせられる部分がある。私は、今まで何かにとらわれるだとか、そんなこととは深く考えてこなかった。しかし、私の日常も、ある誰かからしたら非日常なのかもしれない。自分の見えていることや、当たり前なことだけに縛られないように。そう思うと、毎日が豊かで様々なことであふれているのに気付く。そしたら、人間はもっと面白く生きられるような気がするのだ。

漱石のこれらの言葉は、過去の人々だけでなく、今現在の私たち

にも訴えかけるものがある。いくら世界が進歩しても、決して色あせることのない漱石の言葉には、さすが文豪と言わざるをえない。「三四郎」の一行が、私にとっても大切なことを教えてくれた。そしてその言葉が伝えてくれたことを忘れずにいたい。

### 《中学生の部》

佳作

### 人間の弱さ

新宿区立落合中学校 2年

岩佐 有人

作品名 『こころ』

選んだ一行

『おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ』という感じが私の胸に渦巻いて起こりました。

『おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ』という感じが私の胸に渦巻いて起こりました。』

この一行は、友人であるKの「お嬢さん」に対しての気持ちを知りながら、Kに黙って婚約の話を進めてしまった「先生」の罪悪感

から、また「奥さん」からその話をKが聞いた時、かなり動揺したはずのKが、その場では淡々とお祝いの言葉を述べたその立派な態度に対して「先生」が発した言葉である。そこからは「先生」の人間としての弱さと、自分の卑怯さに対しての何ともいえない気持ちににじみ出ていた。惨めの一言に尽きる。

さらに、「先生」が、自殺したKを発見した場面でも、「先生」の人間としての弱さがわかる。Kの残した遺書に、自分に対しての恨みや、「先生」の卑怯さについて書き残されていたらどうしようという、なんとも自分勝手なことも考えている。

実は、この「おれは策略で勝っても人間としては負けたのだ」という言葉は、Kが自殺した後、時は流れて、「先生」が知り合った青年に宛てて書いた「先生」の遺書の中の言葉だ。

はっきりいって、青年宛ての遺書に書かれた「先生」のその後の人生は悲しいものだ。罪悪感にかられて、人生をしっかりと生きられず、最後の最後に、「策略に走って人として負けた」という事実能耐えられず自殺を選ぶ。

「先生」のその後の人生を見てもわかるように、自分の幸せのために、人間として胸を張れないような手段をとることは、長い時間かけて自分のところを腐らせてしまう。また、自分が自分自身に胸を張れないようなことで何かを手に入れても、いつかは、自分自身が卑怯な自分を許せなくなってしまう。

友達を裏切って策略に走ったり、Kの遺書によって真実がばらさ

れてしまうことを恐れたり、正直「先生」は立派な人とはいえない。ただ、だからといって「先生」をダメ人間と言い切ることもできない気がする。「先生」に限らず、人は弱いものだと思う。自分もきっとそうだ。自分の幸福のために、つい「人としてどうするべきか」ということを忘れてしまうこともある。でも、卑怯なことをして何かを得ることと、正々堂々とした振る舞いによって目先の何かを失うことと、どちらかを選ばなければいけないなら、自分だったら、やはり正々堂々胸を張れる道を選べばいいと思う。

私が選んだこの「こころ」の一行は、この先私がかに迷った時、何を重視して答えを出せばいいのか、またどのように自分が行動すればいいのかを、いつでも考えさせてくれる、そんな一行だ。

## 夢十夜「第七夜」を読んで

新宿区立新宿中学校 2年

兼重 遙

作品名『夢十夜』

選んだ一行

けれどもどこへ行くんだか分からない。

私がこの一行を選んだのは、とても考えさせられる一行だったからだ。

主人公は大きな船に乗っている。そしてその大きな船は毎日凄まじい音をたてながら進んでいる。だが、肝心の行き先がどこか分からない。

船にせよ車にせよ飛行機にせよ、必ず目的地があって進んでいる。目的地があるからこそ、乗客も安心して乗れる。なのに、主人公はどこに行くのかも分からない、そんな船に乗っている。これは一体何を表しているのだろうか。

私たちは人間に生まれ、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学、

就職と進んでいく。生活のしかたは人それぞれだが、皆同じ道を歩む。しかし、同じ道を歩んでも歩む過程や歩む方向が別々になるのはなぜなのか。

人は目的をもって行動している。もちろん生きることにも目的はある。結婚して幸せになるためや人の役にたつため、人に認められるためなど、いろいろある。目的があることで果たせたときの達成感や、果たすまでの過程などを楽しむことができる。しかし、時として目的を見失ってしまうことがある。

例えば、私の好きな味噌ラーメンを食べているときに「なぜ私は味噌ラーメンを食べなければいけないのか」とは思わないが、嫌いなピーマンを食べているときに「なぜピーマンを食べなければいけないのか」と思ってしまう。

これが食物の好き嫌いや勉強の得意不得意ならあまり問題はないが、人生の目的が分からなくなってしまうたら…。

自分が何のために生きているのか分からない。だが、月日はどんどん過ぎていく。そんな人生の航海を、夏目漱石は目的地も分からず、ただ毎日凄まじい音をたてて進む船に例えているのではないだろうか。

第七夜の主人公は、最終的に船に乗っていることが詰まらなくなり、海へ飛び込む。これは、自分の人生が詰まらなくなり、飛び降りてしまったと私は解釈した。だが、もし私が主人公の立場にいたとしたら、この詰まらない人生に自分で生きるための目的をつくる。

死にたくないからだ。

どんなに小さくても「この目的を果たすまで」と生きる力が湧くのなら生きる目的が分からず、ただ月日だけが過ぎる人生にはならなかったと思う。それに、もし主人公に生きる目的を教えてください、仲間、または生きる目的になる人がいたのなら、主人公は海に飛び込まなくて済んだかもしれないし、飛び込んだことを後悔しなくて良かったかもしれない。目的を見失ったとしても、自分で見つけ出すことはできたはずだ。諦めずに探し続けることは、生きていく上でとても大切なことだと思う。

## 《中学生の部》

佳作

## 腹の中

暁星中学校 3年

鈴木 大輔

作品名 『「こころ」』

選んだ一行

「すべてを腹の中にしまっておいてください」

兄の勧めもあり、僕は夏目漱石の「こころ」を読むことにした。日頃読書をしないう僕にも、するする読めたことにまず驚いた。ましてや百年も前の本にも関わらず。

物語の筋はとても単純で、「先生」から「私」への遺書が半分を占めている。人の遺書が主な内容なのも知らなかったのでなおさら驚いた。不謹慎だが、本当に面白かった。

僕が選ぶ一行は、最後の一行の最後の部分である。

「すべてを腹の中にしまっておいてください。」

衝撃だった。

終わり方をとても気にして緊張しながら期待しながら読んでいて、読了した達成感も、読み終えてしまった物悲しさも感じたのだが、なにより衝撃が一番だった。おそらく自殺をすることを断固たる決意でしていた「先生」は、もちろん誰からの説得なんて受け付けないだろうし、助けてほしいとも会話をしたいとも思っていなかっただろうし、死ぬまで実際に会話を誰ともしなかったはずだ。つまりその文が「先生」の最期の言葉なのだ。

「先生」は、自分の隠された秘密を含め、今後自分の奥様にも伝えてはならない死の理由を「私」に共有させ、背負わせているのだが、この遺書を残す行為自体は、後世の為になるとも述べている。だれにも伝えずに死ぬのはもったいないとも言っているのだ。その通りだと思う。人の命はどれも重く、肯定はできないが、自ら命を絶つ理由は人のこころを深く考える際に非常に役に立つかもしれない

い。ある意味、貴重ともいえる、とても悲しい秘密を「腹のなかに」しまうように言ったのだ。「先生」は、「私」に慕われていることを知っているし、自分の死を悲しむことぐらいは分かっているはずだ。「腹のなか」より「胸のうち」の方が、なんだかしっくりくる気がするのだ。それが凡人と天才の違いなのか、当時はこの表現が普通なのかはわからないが。一人の人間の死にまつわる秘密を敢えて、アクの強い表現をすることが僕には何より衝撃だったのだ。

《中学生の部》

佳作

## 彼の理解者

筑波大学附属中学校 1年

河野 敬長

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭のほうへなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴って、手を放すと、向こうの生け垣まで飛んでゆきそう  
だ。

漱石の自伝的小説『坊っちゃん』。この作品の中で、心に残った風景描写がある。それは、「すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭のほうへなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴って、手を放すと、向こうの生け垣まで飛んでゆきそうだ。」というやや長い一文だ。

さて、この手紙には前置きがあった。それは、風邪を引いていたが自筆で書いたから字が汚く読みづらいかもしれないけれど、一生懸命に書いたので最後まで読んでほしい、という差出人からの願いだった。主人公は、元来手間の掛かる面倒な事をしない横柄な性分だが、この読みづらい手紙を黙々と読んでいる。なぜなら、彼女が苦労して書いてくれたからと推測したが、どうもそれだけではないような気がするので、自分なりの答えを出してみた。

ここで、「清」という老婆と主人公の關係に着目する。作品の始めの方で、父とは仲が悪い、兄とはよく喧嘩をする、母親には迷惑をかけてしまったまま死なれてしまう、と書かれており、実の家族とうまくいっていないかった。さらに、何か言われるとすぐに頭に來てしまう気性で、二階から飛び降りて怪我を負う、指をナイフで切る、柿泥棒と喧嘩をするなど、破天荒な問題児だったことが分かる。だが、そんな主人公のことをやたらに可愛がっていたのが下女の清だった。曲がったことを言っても褒めてくれる、欲しい物を買ってくれる、困っていることを察して小遣いをくれるなど、何時も主人公に見えない力を与えて寄り添ってくれる存在だ。清は、彼にとっ

て無くてはならない唯一の理解者なのだ。

もういちど手紙を読むシーンに戻ってみる。清からの手紙があおり風になびいているところだ。あくまでも予測に過ぎないが、秋の初めに吹いた風と手紙には、差出人への「離れたくない・離れたくない」という強い思いが詰まっていたのだろう。何故そう考えたの

かというところ、主人公は四国にいるが清は東京にいたので、現代でいう海外ほどの物理的距離がある。さらに、今までずっと一緒にいたのに、長い間離れることになった精神的な距離もある。この二つの距離を、秋の風に重ねた描写は、主人公の素の心を表わした美しい場面であり、ぼくは読んだ途端に好きになってしまった。

正直でありすぎると、損をすることがある。しかし、主人公のように周りに影響されず自らの気持ちに反することない特異的な生き方は、どんな時代でも筋が通っていて良いのだと、この作品から学ぶことができた。ぼくは、白黒はっきりしている彼のある種の実直な生き方を参考に、「自分の心に嘘のない人生」を生きていきたいと思った。

## 自分を伝える

渋谷教育学園渋谷中学校 1年

田井中 美海

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る

彼、夏目漱石は何を想ってこの文章から始めたのだろうか。私は「坊っちゃん」を読んだ後、感想もそっちのけでそのことについて一心不乱に考えた。しかし、私は彼を深く知らなかった。だから私は、彼の人生そのものを調べ、学んだ。そして、再度「坊っちゃん」を読み直し、ひとつのことに気がついた。彼は自分のことを大勢の人に知ってもらいたいのだと。つまり、こういうことだ。自らの人格を「坊っちゃん」に移して、文章にすることで大勢の人に読んでもらう。そうすることで自らを他人に伝えて、他人に評価してもらおうことができる。実に見事な考えだと思った。

今の私はどうだろうか。普段、私は、自分の友人に他人の話とし

て、「自分」を語ることがある。そして、そのまた友人に伝えても構わない、と言う。そんな人がいるんだね、としか伝わらないことに薄々は気付いているけれど。また、面と向かって自分の言葉で伝えるのであれば伝えることも少なくともはないと思うが、今の私達はスマホで会話する。そこで簡単に伝えた「自分」は、日々変化する友人の気持ち次第で他人に伝わったり、あるいは間違っただけで伝えられずもする。時には伝えられることもなく、誰にも二度とみられることもなくおいていかれたりもする。

そんなことを考えているうちに、夏目漱石と私には同じところがあることにも気が付いた。二人とも架空の人間を通して「自分」を誰かに伝えようとしているところである。「自分」を伝えたいという思いはいつの時代も同じなのだろうか。私と違って夏目漱石は、文章で伝えることで、意図して（いや、意図してはなかったのかも）自らを伝えるのに最適な方法をとることができていたのである。のちにこの「坊っちゃん」はよく売れ、私のように多くの人が手にとり、彼が求めていたものになっていったのではないかと思う。彼は自らを伝えることに成功したのだ。

こうやって考えると、やはり文章で自らを伝えることにした夏目漱石のことを、実に利巧で賢い人なのだと再認識した。本当に素晴らしい。時代を超えて、今の私に何かを考えさせてくれる。

私は今年ようやく長かった受験勉強が終わり、少し時間ができた。前から楽しみにしていた小説を書いてみようかと思っている。その

ためにも、今回「坊っちゃん」を読んで考えたこと、分かったこと、感じたこと、そしてこの文章を書いたことを活かしていきたい。私だったら物語の最初の文章を何にすればいいだろうか。どう表現しようか。夏目漱石に負けない文章を書こうと意気込んでいる。

## 《中学生の部》

佳作

### まっすぐに生きる

日本女子大学附属中学校 1年

榊原 佳那子

作品名『坊っちゃん』  
選んだ一行

世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考えてみる。

曲がった事が嫌いな主人公と、不器用な彼を「坊っちゃん」と呼び可愛がる下女の清。坊っちゃんが東京を離れ四国に教師として赴任するところから物語は動き始める。校内で起こる理不尽な出来事に対して毅然と立ち向かっていく主人公の口から出る正直で、真っ

すぐな言葉が読者に響いてくる作品である。

私が選んだ一行は、主人公の正直でまっすぐな生き方を裏付けている。宿直中に布団の中へバツタを入れられたり、天井を踏み鳴らされて睡眠を邪魔されたりと、生徒達からいたずらを繰り返される主人公は「嘘を吐いて、胡魔化して、陰でこせこせ生意気な悪いはずらをする」下劣な根性だと腹を立てる。卑怯なことには絶対負けてなるものかという場面での一文だ。もし坊っちゃんが今に世に生きていたらどうなっていたらどうかと考えた。清が「真っ直ぐで良い」とほめた彼の性格。「自分だけ得をするほど嫌いなことはない」という清廉な姿勢。理不尽と戦い「あした勝てなければ、あさって勝つ」という正義感。どれも理想的で正しい生き方である。しかし同時に不器用な生き方でもある。理想と現実という矛盾を抱える社会生活に於いて、全てにまっすぐで正直であることは、時として人と衝突したり、協調性がないと評価されてしまうことがあるからだ。

私達には「表現の自由」が権利として認められている。SNSが普及し、いつでもどこでも誰にでも自分の思いを発信できる。ところが正直に心の中をつぶやいただけで「炎上」という恐ろしい事態に巻き込まれたりする。個人のまっすぐな意見は物凄い批判と中傷にさらされる。一方でまっすぐに言うことを避け「くみたいな？」「〜ってかんじ？」と語尾を濁して仄めかしたりもする。仄めかされてることが理解できないと「空気読めない」「行間読めない」

と、やはりまた批判される。まっすぐでも責められる、ぼんやりでも責められる。一体これからの私達がまっすぐに生きていくにはどうしたら良いのだろうか。

私は二つのことを提案したい。一つ目は「しなやかな強さをもつ」ということだ。坊っちゃん生き方はしなやかではない。すぐに腹を立て相手の非を責める。正しいか正しくないかという基準で相手を打ち負かすやり方は、現代の複雑で多様性に富んだ社会には通用しない。広い視野を持ち柔軟に判断していくことが必要だ。二つ目は「転んだら立ち上がる」ということだ。人は生きていく上で必ず何度も失敗をする。だから転んでしまった時の立ち上がり方を知らなければならぬ。坊っちゃんは誰のせいでも何のせいで転ばされたかにこだわってそれを責めている。ポキンと折れないしなやかな強さ、転んでもへこまずに立ち上がる術、これらを身につけることで、私達はまっすぐに正直に生きていくことができるのではないだろうか。

## 《中学生の部》

佳作

### 二面性考

日本女子大学附属中学校 1年

高橋 佐和

作品名『草枕』

選んだ一行

喜びの深きとき憂愈深く、  
楽みの大いなる程苦しきも大  
きい

読書家の祖父に漱石のお勧め本を聞くと、「草枕」と「私の個人主義」を挙げられ手に取り、すぐに後悔した。夏休み中読み返しても、逆立ちしても、中学生の私には到底手の届かぬ言葉の戯れだったからだ。漱石が文学の神様とされる所以に大いに納得し、教養とはこれだと思った。漢文、詩歌、英語に画家、仏教用語、骨董、歴史と初耳のオンパレードでありながらそれを繋ぐ日本語の技巧とリズムは滑る様に美しく、絵画の様な芸術作品だ。

本題に入るが、内容は難解で消化不良に終わったが、一文毎の見事さは圧巻で、心に響く文章満載でこの課題には最適だ。まず冒頭

の文から有名だが、沢山論じられているので見送ってこの一文を選んだ。漱石が三十歳にして悟った境地とあるが、十三歳の私にもこれは十分理解できた。また本の主線にある青年画家が温泉場の出戻り娘那美の絵を描くのに、足りない所があると描けず、最後に別れた夫が満州に行く汽車を見送る“憐れ”の表情を見て、それで画を描ける、という点にも関わる文だと思ふからである。

物事には必ず二面性がある。大きな喜びや楽しみと大きな憂や苦しみが表裏一体なのは自然界の摂理だと思う。大好きなライブも最高に楽しいが、終わると虚しい。責任ある役を引き受けると、やりがいもあるが、やらなければ良かったと思う程プレッシャーを感じる。全てを手に入れていた様な芸能人も、その分失った物や不自由があると思う。一世を風靡した有名人も過去の栄光が忘れられず余計に追いつめられる例も多くある。会話を便利にする為の携帯電話により会話が希薄になった、とされる皮肉的二面性もある。良薬口に苦し、万事塞翁が馬、等諺にも表される。

そうした世の常をわかりながらも、人の羨ましい部分ばかり目に行き、自分の足りぬ点を思ってしまう。しかし、狭い部屋なら掃除が楽で、テストが悪ければ伸びしろがあると考え、物事の逆を見て発想転換すると、漱石の言葉を借りれば、住みにくい世も住みやすくなると思う。

那美も美人で魅力的ながら足りぬ点がある。それは、小説の中とは言え、人を書く時に二面性を持った生の人を書かないと不自然さ

が起こる。またそうした隠した一面を見せてこそ、より描きがいのある被写体にもなる。那美の見た憐れは、哀れが物悲しい様に対し同情すべき様と辞書にあった。大胆で気狂とも思える那美の、人間らしい一面を画家はとらえ、腑に落ちたのだと思う。

漱石は、この本で西欧を批判し東洋趣味を高唱しているが、その二つもまた二つ存在するからこそ世だと思ふ。私も今後も二面性を上手にとらえていける自分でありたいし、本書の知識量と日本語の機微を受け止められる器を身につけるべく、勉学に励みたい。

### 《中学生の部》

#### 佳作

#### 罪

大阪医科薬科大学高槻中学校 2年

土田 悠加

#### 作品名『こころ』

#### 選んだ一行

あなたはそなた一人になれますか。なってくれますか。

この小説を読み終えて、何となく後味の悪い中で、人間というものはもともと孤独な生き物であるという、やや悲観的とも言える気持ちになった。互いに時間や場所を共有することはできても、それぞれの「心」までは共有することができない、「心」を理解するということは極めて難しいということを改めて思い知らされたような気になった。

「先生」と呼ばれる人物は学生時代に金銭関係のことで叔父にだまされてしまい人間の無情さや醜さを思い知る。この時、先生は、「自分だけはまっとうな生き方をしよう」と誓ったはずであるが、結果として、愛する人を勝ち獲るために親友をも裏切り、自殺に追いやってしまった。あれほど憎んでいた奴と同じ「さげすむべき」人間性が自分にもあったと気付いた時の衝撃はどんなに大きかっただろう。その結果、彼は自分をはじめとする人間不信に陥ってしまったようである。

誰に対しても常に悪人というのはそんなにいないと思う。むしろ良い人と思われているような人が、いざ追い詰められた時や、私利私欲に目がくらんだ時などに、驚くほど冷たく、醜い心を出すのではないだろうか。でもその心はおそらく人間なら誰しもがどこかに隠している、もしくは単に気付かずに過ごしているだけだと思う。そうであれば、先生のように自分を追い詰めるところまで悩み苦しむ必要はないのではないか。

そのような先生に「私」は、心ひかれ親しくなっていくのである

が、これは恐らく先生と「私」に何かしらの共通点を感じたからである。この共通点とは『淋しさ』ではないかと考える。この淋しさというのは「交流する」人間がいないという単純なものではなく、もっとずっと深い、「心を共有できる」すなわち「分かり合える」人間がいないというものだと思う。誰かと一緒にいながらにして感じる淋しさほど痛切で残酷なものはない。

私が先生のことを「人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手を広げて抱きしめることができない人」と書いているように人を疑いたくないのに疑わずにいらなかった、信じたくても信じることができなかった先生にとって「私」という存在は、もしかしたらもう一度人を信じられるかもしれないという一つの希望のようなものであったに違いない。この本を読んで私は、人間は弱くもろいものであるということ、人は誰でも淋しさを抱えて生きているということを感じた。それを肯定して受け入れることで優しさが生まれてくる。その優しさこそが人間の真の強さであると思う。このことをいつも胸にとどめながら人に優しく、つまり、強く生きていこうと思った。

聞こえてくる小説

渋谷教育学園渋谷高等学校 2年

井口 陽南子

作品名『琴のそら音』

選んだ一行

露子の銀の様な笑い声と、婆さんの真鍮の様な笑い声と、余の銅の様な笑い声が調和して天下の春を七円五十銭の借家を集めた程陽気である。

張りつめた空気が一気に緩んだ後の幸せな情景を描いたこの一文は、心地よい金属の音のハーモニーが本の中から響いてくるように、そこに主人公である「余」と婚約者の大事に思い合う気持ちや若い二人を見守る婆やのどっしりとした安定感も感じられ、特に好きな一文である。

音には、不安を掻き立てる音、心が安らぐ音など人の様々な感情を呼び起こす力があると思う。幼い頃の映画館で、迫力のある水の流れの激しい音に自分も流されるような恐怖を感じて泣いたことを

今でも鮮明に覚えている。また様々な音が重なることにより、ある情景を思い浮かべることが出来る。例えば、蝉の声や風鈴の音に高校野球の応援マーチが流れるテレビの音の重なりを聞けば、のんびり過ごす夏休みの午後をイメージする人が多いのではないだろうか。本来、音は耳で聞くものであるが、この小説では「余」の感じ取った音の説明がとても丁寧に豊かに描かれ、実際に耳から聞くよりも想像がはるかに膨らみ、まるで本から音が聞こえてくるかのように感じた。

「余」の不安は、友人の津田君の親戚がインフルエンザで息を引き取ったのと同時に戦地にいる夫の鏡に現れたという話を聞かされたことに始まる。さらに、婚約者のインフルエンザにはくれぐれも注意するように言われ、急に病状が心配になる。津田君の家からの帰り道、いつも聞いている鐘の音を妙な響きを感じる。何となく気がかりなことがある時に耳にする音は普段と違い不安を増幅させることがある。「あの音はいやに伸びたり縮んだりするなと考えながら歩行くと、自分の鼓動も鐘の波のうねりと共に伸びたり縮んだりする様に感ぜられる。」「余」がこの鐘の響きに自らの呼吸を合わせてしまいそうになる場面で、私も一緒に呼吸を合わせて不安な世界に引きずりこまれてしまった。そうなるともう全てが不吉に感じられていく。雨が闇の底から蕭々と降る中、乳飲み子の棺桶とすれ違い、「余」は死を連想する。死を意識した「余」は提灯の赤い火が消えたのを見て婚約者の死を想起し、家に帰れば婆やが不吉な予

言をし、追い打ちをかけるように犬の遠吠えが聞こえてくる。犬の遠吠えは「軒をめぐる雨の響きに和して、いづくよりもなく何物か地を這うて唸り廻る様な声」で「陽気な声を無理に圧迫して陰鬱にした」声だという。「余」は朝まで不安で眠れずに過ごす。

翌朝、婚約者の家に駆けつけ無事を確認し、様子が変であったことを逆に心配されて、冒頭の笑い声の場面に繋がる。真っ暗な夜の不吉な予感に苛まれる主人公と共に緊張が頂点に達したところから、何事もなかった幸せにほっとする場面まで、息を詰めて一気に読み切った。音が聞こえて気配まで感じられるような臨場感に、まるで短い映画を見たような気がした。

#### 審査講評

小説における「音」の問題に着眼した点がユニーク。様々な音からイメージがふくらんでいく作品を純粹に楽しんでいる。読者に追体験させて物語を盛り立てている好感の持てる作品。

#### 《高校生の部》

#### 優 秀 賞

#### 私の一行

水城高等学校 1年

汐見 理沙

#### 作品名『夢十夜』

#### 選んだ一行

抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖かくなった。

私は、「夢十夜」を読んで、なんてロマンティックなんだろうと思いました。好きなシーンは、女を埋葬するシーンです。穴を掘るのにシャベルではなく、真珠貝を使い、柔らかい土をかけるたびに貝の裏に月の光が差すという所に、埋葬という生々しさより、幻想的な美しさを感じてしまうほどでした。

そして特に、女が死んだ後、墓の上に、星の破片を乗せていく時の一文が心に残りました。

「抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖かくなった。」

ここで抱き上げている星の破片というのは、女の涙だと思いました。死んで星になった女は、天から男がずっと墓の前で待っていてくれるのを見て、涙を流したのだと思います。その涙は、遠い所から困難を乗り越えやってくるので、角が取れ丸くなってしまふのだと思います。

男もそれをわかっているので、ただつまむのではなく、「抱き上げて」いるのだと感じました。大事にそっと、やさしく扱っている様子が目に浮かびます。

だから、抱き上げていると、手が暖かくなり、愛しい女の温もりを思い出し胸も暖かくなったのだろうと思います。

私は初め、貝で穴が掘れないだろうとか、そもそも死ぬ死ぬ詐欺ではないとか、あまり作品に入り込むことができませんでしたが、二度三度読み込むうちに、現実的な事柄を超越して、幻想的な世界に誘われました。色に例えるならば、夜明け前の青紫、ドーンパープルです。人間が初めに見る色とも言われています。このふわふわした高揚感、脱リアルに徹しているから得られたのだと思います。

それ故、ホタテ貝などではなく、月の光に白く輝き得る真珠貝でなくてはならないのです。最後に出てくる女の化身ともいべき、「白百合」に繋がるような気がするからです。

そう考えると、一つ一つ道具や作法が決められている美しい埋葬の儀式のようにも思えてくるから不思議です。そのルールは、女が

前もって書き残したのではなく、死ぬ間際に話したことによって、より深く、より鮮明に男の中に残ってしまったのではないでしょう。まるで、体に乗っ取られての行動のように見えなくもありません。または、洗脳されたかのようにも。このように、この話を読んで、恐ろしく美しい閉塞感を味わうという、貴重な経験ができました。

#### 審査講評

あたたかい温度が感じられ、映像的でもあり素直な作品。ロマンティックで幻想的な美しさがある感想文。「夢十夜」の不思議な描写の細部を読み解いている。

## 純粹な心

光塩女子学院高等科 2年

永井 咲陽

作品名『硝子戸の中』

選んだ一行

その達人が雪と氷に鎖ざされた北の果に、まだ中学校長をしているのだなと思う。

『硝子戸の中』は、人との出会いと別れが生む温かさや優しさ、時に悲しみや苦しみを克明に記した約やかな随筆作品である。世の中を生き急ぐ「忙しい人」にとって、硝子戸に上って外界と隔てられた書齋にいる私のもとを訪ねてくる、様々な事情を抱えた来客との出来事を「つまらぬ事」としつつも、作家としての鋭い観察眼を用い委悉に表現された文章からは、漱石の、名声を得ているにも関わらず決して驕ることの無い、謙虚で摯実な人物像が伺える。本作品を無心に読み進めていくと、まるで自分も漱石や訪問客らと同じ時間を共にしているかのような感覚に陥り、読み返すたびに登場人

物に抱く「懐しさ」は増していくばかりである。

その中でも特に私の心に寄り添い、しみじみと心に迫ってくる一文が、漱石の高等学校時代からの朋友・太田達人との章を締めくくる、「そうしてその達人が雪と氷に鎖ざされた北の果に、まだ中学校長をしているのだなと思う。」である。この章は、ほかのどの章よりも透き通っていて柔らかな光に包まれているように感じる。たとえば、漱石と太田が久闊を叙する場面。太田は、座蒲団にきちんと座っている漱石に「いやに澄ましているな。」と声をかける。本来ならば、嫌味にも受け取れるこの言葉だが、漱石の口から滑り出した返事は「うん。」。そして、漱石は、「私はその時透明な好い心持がした。」と述べている。太田の飾らない率直な言葉を受けて、漱石は気取らない純粹な心情に戻ることができたのだ。また、漱石は、太田を、尊敬と愛しさをもって「敬愛に値する長者」と称し、何事においても自分を凌駕していると思っている。そして、ついには「達人」という太田の名は天賦の名であるとまで言い切っている。おそらく漱石は、闊達で達識の人である太田は、「學術・芸術に通じている人」「人生を達観した人」の意である普通名詞『達人』に完全に適合すると思っただけであろう。先ほど紹介した一文にはこうした、漱石の太田に対する万感の思いが託されているように感じ、思わず笑みと涙がこぼれてしまいくらいになる。漱石が辺境の地で教壇に立つ大器な親友・太田をどれほど大切に、そして親しく思っているかが切々と伝わってきて、私は今までに感じたことがなく

らしいの快爽とした麗らかな気持ちになった。

清澄な彼らの関係は、いまだ誰とも断琴の交わりをもたない私にとって、羨望の眼差しを向けるまでに一切の時間を要さなかった。

私も含め、友人たち皆が日常の会話の中で真っ白な心で「うん」と答えられたならば、どれほど気持ちが良いだろうか。漱石と同じように、「透明な好い心持」がするだろうか。私は提案したい。時には難しいことで頭を悩ませていないで、「うん」と答えてみようじゃないかと。

#### 審査講評

作品をきちんと読み込み、何気ない一節を選んで光を当てている。言葉の使い方にも勉強の跡がうかがえる。

#### 《高校生の部》

#### 紀伊國屋書店賞

### 住みにくい人の世の、私の処世術

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 2年

丸山 夏奈

#### 作品名『草枕』

#### 選んだ一行

とかくに人の世は住みにくい

芸術家になりたい。脈絡もなくそう思うことがある。純粹に創作活動を行っているときが一番楽しく幸せだと感じているという理由もある。しかし衝動的に芸術で生きていきたいと思うのは、心の片隅に芸術は一般社会とは異なったものであるという考えがあるからではないだろうか。本質を見失った勉強を強制される学校も、自分が口にする物についてさえろくに理解していない食卓も、あらゆるものが日常であるのごく自然に考えられている世の中が時々どうしようもなく嫌になる。私の暮らすこの世界はあまりに私に優しくない。そんな世界は息がしづらくて住みづらい。そんな思考に陥っていた私は「とかくに人の世は住みにくい。」たったこれだけの一文

に共感せざるを得なかった。蚤の国か蚊の国か、何と出るかはわからないが、芸術の国は住みやすい場所に見えて仕方がない。私の目には芸術で生きている人はただの人とは違うように見えて、彼らを作る世の中がこの上なく魅力的に映るのだ。彼らの様になれたら、住みにくい人の世から解放されないだろうか。そこは確かに、非人情の、人でなしの国かもしれない。それでも、人でなしの国の生きやすさについては余も推測の域を出なかった。究意、芸術の国は蚊も蚤もない理想郷としか考えられなくなる。

しかし余にとって、芸術は生きていきにくいこんな世の中に、在るものだった。そんな余を私は理解できなかった。余は画家だった。空き時間を見つけて自分のためだけに制作活動を行う私とは違い、画を描いて生計を立て、日常生活で詩を思い浮かべているような芸術家だ。余と比べるまでもなく気に入らないことがあるからと駄々をこね本気で芸術の道を選択する行動を未だとれずにいる私は芸術を語るにはおこがましすぎたのだろう。成人さえしていない幼い思考も問題だろう。余を理解できなくて当然である。余はあらゆる芸術は尊いともいった。私はこれに大手を振って賛成しよう。芸術が尊いことを、芸術は暮らしを豊かにすることを、余と私は分かり合えた。今の私が出来たことは、ただそれだけだった。余のいう通りこの世に芸術があるならば、それに本当に気付けたとき、私はもう少し気楽に生きていけるような気がする。

私が芸術家になったら、余の年齢まで達せば、私も余の考えに至

るのだろうか。余も私と異なる、ただの人であったのだから。住みにくい世の中を、ただの人として、ただの人と共に利己的にも利他的にもなりすぎずに、なんとかこれからも生き抜いていかなければならない。そう考えると、余は私たちに随分と大きな課題を投げかけていったように思う。余を、私はまだ知らない。芸術は大切だ。私と余が共鳴したこのことだけを胸に、とりあえずこれから生きてみよう。とかくに住みにくい人の世を、芸術と共に、何とか、生きていこう。

#### 審査講評

「芸術家で生きていたい」という願望が一貫して述べられている。作品と共鳴した願望や決意は爽快である。リズムカルで小気味よい文章は、ひとつの作品のよう。

## 「漱石」の優しさと身近さ

桐蔭学園高等学校 2年

久島 萌佳

作品名『余と万年筆』

選んだ一行

ペリカンを追い出した余は其姉妹に当るオノトを新らしく迎え入れて、それで万年筆に対して幾分か罪亡ぼしをした積なのである。

「なんて人間味の溢れる言葉たちなのだろうか。」これが、私が最初にこの作品に出会った時の感想でした。

私が選んだのは、「余と万年筆」の最後の一文です。この作品は、漱石が万年筆と不器用に付き合っていく様子が描かれています。私は、この作品が漱石の著書の中で、最も彼自身の人間らしさが現れていると考えています。その中でも、選んだ一文は、特にその色が濃く表れていると感じます。

私は、漱石に対して、執筆に関するものであれば何でも使いこな

せるというイメージを持っていました。また、彼自身を、物語の登場人物のように遠い世界に居る人物のように感じていました。今まで、漱石の紡ぎ出す物語は読んでいても、彼の綴るエッセイ等には触れてこなかったからです。この作品を一読して、衝撃を受けました。万年筆を使う事に試行錯誤する漱石が、なんとなく身近に感じられたのです。時代に置いていかれないように、一生懸命に万年筆を解そうとする。またペリカンに虐待された彼が、その苛立ちを其にぶつけ、生まれた罪悪感を少しでも軽くしようと、新しくオノトを迎え入れる。漱石の少し少年っぽさの残る心の内を垣間見ているかのような雰囲気、親近感を感じます。

それに加え、この作品の中には、ペリカンを生き物として表しているような描写が多くあります。「船のなかで器械体操の真似をして」「遠慮なくペリカンの口を割って吞ました」など、インパクトの強い言いまわしが数多くみられます。それらの中で最も印象深かったのが、最後の一文にある「ペリカンを追い出す」という表現でした。「追い出す」という言葉を使う事によって、まるで庭に来た何かを追い返すような、少し素っ気ない言いまわしに感じられました。また、そのようなイメージから、最初に読んだ時に浮かんだ風景は、私たちの日常にあっても違和感の無いようなものでした。少し古びた木製の家に住む漱石が、庭にやってくる生き物と打ち解けようとする風景です。このイメージも相まって、より人間味の溢れる作品と感じたのかもしれない。

また、「余と万年筆」の原稿は、ペリカンではなく魯庵から漱石に贈られたオノトという万年筆によって書かれたものです。本文の最後の方には、オノトを褒める言葉も書かれています。このような所にも、漱石の人柄の良さや温かさが表れているのではないかと感じました。

万年筆を相棒として認め、擬人化して描写する楽しさに溢れた魅力的なラストです。

#### 審査講評

よい一行を選んでいる。エッセイのなかからの確に漱石の人柄を観察できている。万年筆と漱石のつながりをとらえた興味深い一文。

#### 《高校生の部》

#### 早稲田大学賞

#### 芸術

ルーテル学院高等学校 1年

松村 大知

#### 作品名『草枕』

#### 選んだ一行

あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」この名言に惹かれた僕は「草枕」を読み始めた。この言葉から主人公の上手いかない人生に悩み、もがいて何とかしようとしている様子が伺える。さらにこの言葉を引き立てているのはこの直前の「山路を登りながら、こう考えた。」という一文である。自分が信じていた道をいざ登りですが、ほんとうにこれで良いのか迷っている主人公の不安な気持ちが増しているように感じる。

そんな冒頭から強い印象を与える本作品だが、読み進めていくう

ちにある言葉が心にすんと落ちてくるような感じがした。それは冒頭文の続きのこの言葉だ。「あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。」これは主人公が悩みもがいた末にたどり着いた言葉だ。自分の事で精一杯であっても、正しい事をして報われるわけではないし、頑張っても上手くいくとは限らない。

しかし、少しでもこの世界を良くするために何が大切なのか発見し、まずは自分から始めてみようという行動していた主人公の心がこの言葉には込められていると思う。また、この主人公の思いというのは夏目漱石の思いでもあるのだろうと思う。まだ現代よりはおおかだと思われる明治の時代にあっても、現代の芸術の重要性に思いを馳せるような気分にもさせてくれる。手先のものばかり気にして周りに気を配る余裕がないこの時代へ向けての夏目漱石の「芸術と共に心を成長させなさい」というメッセージが込められているのだろう。芸術は、どんな時にもどんな人にも時代を越えて平等に人の心を満たしているという事を思わせる。芸術が人の世を支えていると言っても過言ではないだろう。また、「人の世は住みにくい」という冒頭の部分からその後の「芸術は人の心を豊かにするから尊い」と行き着く所や夏目漱石のメッセージを物語の中で主人公の生き様を通して伝えている所、物語の初めに何が一番大切なのか示してあり読みやすい所にも読者を惹くものがある。

僕は、この作品から二つの目標とする人物像が出来た。一つ目は、

決して大きな事ではなくてもその先に見返りがなくても、自分から動き色んな人を支える事の出来る人物。二つ目は、芸術作品のように時代を越え、平等に人の心を満たせる人物。これらに近づくために生涯を通して考えていきたい。

また、物語では、夏目漱石が伝えたいメッセージの背景を知りつつ読み返すとさらに違った視点で物事を捉えることができ、何度読んでも楽しめる。あまり本を読まない僕にとって本を読む楽しさと人生について新しい考え方を与えてくれた特別な芸術作品だ。

#### 審査講評

作品との出会いから、読書はことばによる心の体験であり、芸術はその心を満たす営みであることを呼びかけている。作品そのものの芸術性と、自分との関係に重ねているところに魅力を感じる。

## 三四郎から学んだ人任せ

暁星高等学校 2年

鹿妻 優生

作品名 『三四郎』

選んだ一行

「いえ場所が悪いからだ」

東京に出てきたばかりの大学生三四郎の学問や恋愛に対する葛藤を描いた「三四郎」。その中で彼が乞食に出会ったとき、誰もお金を渡そうとしない理由について「場所が悪いからだ。」と説明した広田先生の言葉が心に残った。人の多いところで物乞いをするよりも、人気のないところで物乞いをしたほうがよい、というのは確かに事実のような気がした。

乞食の気持ちとしては人の多いところで頭を下げれば何人か振り向いてくれる、ということなのかもしれないが、かえって人の多さゆえに誰にも振り向いてすらもらえない虚しさを感じた。そしてその場面の直後に登場する迷子の少女は人々の気には留めてもらえな

の、誰にも助けてもらえない。人の多いところでは助けを求めても助けてもらえず、むしろ人の少ないところの方が助けしてくれるに会えないかもしれないけれど助けてもらいやすい、という点に現代社会にも通ずる矛盾があると思う。

僕も誰かが助けを求めているとき、「自分がやらなくても他に誰かがやってくれる」と思って無視してしまうことがある。しかし僕一人しかいないときは必ずと言っていいほどその人を手伝う。それもやむを得ずという気持ちでなく、積極的に手伝いたいという気持ちになる。それは僕個人に限らず日常生活においても時々目にする光景であり、決して珍しくはない。「自分がやらなくても他に誰かがやってくれる」といった集団心理というべきものを夏目漱石は乞食や迷子を例にして的確に述べていたのだと思う。

また、この時三四郎は都会人とは己に誠である、と感じたときされている。この自分に素直である、言い換えれば自己中心的なところがある、というのは現代で時々耳にし、あまり好きではなかった「東京の人、都会の人は冷たい」という考えと殆ど同じであると思っただ。つまり都会の人が冷たいのではなく、本来の性格に関係なく人の多いところでは誰もが冷淡になってしまうものなのかもしれないと納得することができた。

乞食に出会った場面の広田先生の言葉以外にも、「三四郎」の中に印象に残る文章は多くあった。そしてそのうちの多くは現代の我々への教訓ともなりうるものであると思う。僕には少し読むのが

難しく、時間もかかってしまったが、読み終わったときには百年ほど昔に生きた人の「新しい」考えを取り入れたことへの達成感や、その考えを役立てようという思いが生まれた。夏目漱石の作品が今でも読み続けられる理由がその芸術性以外にもあることに気づき、他の作品も読んでみようと思った。

## 《高校生の部》

佳作

## 悲しい音の意味

麴町学園女子高等学校 1年

渡邊 美咲

作品名『吾輩は猫である』  
選んだ一行

呑気と見える人々も心の底を叩いてみるとどこか悲しい音がする

私が選んだ一行は、「呑気と見える人々も心の底を叩いてみるとどこか悲しい音がする」という言葉です。この言葉は、「吾輩は猫である」の最後のところで猫が言った言葉です。この一文は、私に

自分を理解する事の難しさを知る機会を与えてくれました。

この猫はいつも騒がしい家族と一緒に暮らしています。人間という厄介な生き物をいつも観察し、のんびりと暮らしています。猫の居る珍野家は来客が多くいつも賑わっており、楽しい家庭です。

私は最初、この猫がこの言葉で何を伝えたいのかが分かりませんでした。言葉の意味は分かるのにこの一文を通して何を伝えたいのかが分かりませんでした。私はこの言葉には私たちが普段感じていることを猫からの視点で語った言葉だと思います。いつも仲間や、友達と楽しく話しているのに、一瞬の静かさが少し私を不安にさせます。誰もが一度は感じたことがある不安かもしれません。一瞬でなくても仲間や友達と別れた後、一人で何かをしている時に孤独や寂しい気持ちを感じたことがあるかもしれません。その孤独や寂しさの中に聞こえる悲しい音をこの猫は感じたのだと私は思います。冒頭に私は自分を理解する事の難しさを知る機会を与えてもらったと言いました。この言葉は私の学校での経験と重ねて思った事です。私は友達と話す時、思った事を正直に言うことで友達と楽しく過ごしています。正直に言っているのだから問題はないかもしれません。でも私がある場面で思った事を正直に言うことで誰かに嫌な思いはさせていないかと言う事をいつも一人になってから感じ、不安になります。そこに生まれる孤独な静寂は怖いぐらい静かなのを私は知っています。だからこそ、この猫が私たちに何を伝えたいのかを私は大いに学びました。

この猫が珍野家で聞く様々な声は、珍野家の主人、苦沙弥の正直な声がたくさん書かれています。誰かとただ話しているだけなのにもしかしたら、この苦沙弥も夜ひとりで書齋にこもっている時には少し自分の言葉に不安や孤独を感じているのかも知れないと思いました。

猫の住んでいる珍野家は、くだらない話や真面目な話まで、様々な話をする為に色々な人たちが集まります。その人たちは他愛もない話をしています。そして、みんなで思いつきり笑った後に悲しい静寂がおきます。その一瞬の静寂さを、この猫が私の今まで感じていた答えを教えてくださいました。これからもいろいろな感情を大切に、多くの人達と分かち合っていきたいと思います。

## 《高校生の部》

佳作

### 信用するということ

開智学園中高一貫部 1年

石田 さくら

作品名 『こころ』

選んだ一行

「私は死ぬまえにたった一人でもいいから、ひとを信用して死にたいと思っています。」

「私は死ぬまえにたった一人でもいいから、ひとを信用して死にたいと思っています。」

この作品、特に先生の独白の部分において、「信用」という概念が多くの出来事に絡んでいると私は感じた。

まずこの部分において語り手であり主人公として描かれている先生は、両親の遺産の管理を任せていた叔父に裏切られ人間不信に陥っている。遺産の管理を任せるといことは先生は叔父を信用できる相手だと思っていたと考えていいだろう。作品の前半では先生の何者も信用しない生き様が描かれていたが、この後に彼は下宿先で

の出会いにより厭世的な心がほぐれていった様子が描かれていたの  
で、この叔父に関する一件が先生の人生を変えた直接的な要因では  
ないと考える。しかし、下宿先にKが加わったことから円満だった  
人間関係は終わりを迎えている。孤独に生きていこうとするKを周  
りになじませるために先生はお嬢さんに協力を頼んだ。計画はうま  
く進み思惑どおりになったもののお嬢さんとKの距離感に先生は苦  
しさを覚えるようになる。Kを下宿先に招いたのも計画を頼んだの  
も自ら進んでやった事だったが、お嬢さんに想いを寄せていた先生  
には苦痛になりうる結果だったのだろう。さらにKは恋心を抱き、  
それを先生に打ち明けるのだ。しかし先生はその恋心を知っていな  
がらもお嬢さんと婚約する。これは先生を信用していたKに対する  
先生の裏切りととって構わないと思う。信用していない相手に自ら  
の恋心を打ち明けることはあるまい。婚約を知ったKはそれを苦に  
して命を絶った。信頼している人に裏切られる痛みを知っていなが  
らも、信頼してくれた人を裏切った先生。このことが先生の後の人  
生に大きな影響を与えたのでは無いかと私は思う。

人を信用する、ということとはとても難しいことだと思う。どれだ  
け仲の良い、信用している友達だって何かの拍子に裏切るかもしれ  
ないし、自分だけが信頼関係にあると勘違いしている可能性だっ  
てある。自分が裏切る側になることだってあるのだ。お互いを信用し  
ているか否かは言葉にしてもわからないと思う。「親友になろう！」  
と言ってもなれないのと同じだ。よく秘密ごとを話す時に「信用し

てるからね」という人がいるがそれは相手が信用ならないひとの  
きに言う台詞だと思う。要はその言葉で相手を牽制しているのだ。  
相手を信用しているならばもはやそれは大前提であり、言葉にする  
必要もないのではないか。信用とは形にならない、実に不安定なも  
のであると思う。

私の選んだ一行の続きにはこうある。

あなたはそれのたった一人になれますか、と。その問いに答えるに  
は、どれだけの覚悟をもてば良いのだろう。人と人との間には大小  
の違いはあれど必ず信頼関係があると思う。不安定な、しかし必要  
不可欠なその大切さを改めて考え直すきっかけを、この一行は私  
に与えてくれたと思っている。

## 負のスパイラル

渋谷教育学園渋谷高等学校 2年

野中 智貴

作品名『こころ』

選んだ一行

かつてはその人の膝の前に跪ずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。

「かつてはその人の膝の前に跪ずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。」

「先生」は、自分に対して過度な信用と期待を寄せる「私」に対して、こう忠告する。この一文が私の心に残った理由は、漱石が見事に人間の根幹を問いただしているからである。

漱石が生きた時代は、「自由と独立と己れとに充ちた現代」であった。西洋の文化が初めて日常に入り込み、和洋折衷の精神が開花した。「西洋に追いつき、追い越せ」という開化を前に人々が希望を持っていた時代であった。

しかし、そういった期待とは裏腹に、開化は不幸もたらした。漱石は自身の講演「現代日本の開化」において、この開化に関するパラドックスに言及している。「開化は一般に生活の程度が高くなったという意味で、生存の苦痛が比較的和らげられた」のではなく、むしろ「生存競争から生ずる不安や努力に至っては、決して昔より楽になっていない。否、昔よりかえって苦しくなっているかもしれない。」

このように、漱石は自らが生きていた時代について痛感していた、競争によってもたらされる人間に対する不信や淋しさを、前の一文に込めている。またこの価値観は、いかなる時代においても共通であって、人間の根底を貫通するものである。

例えば、二〇〇一年の米同時多発テロを皮切りに、世界各地で頻発しているテロ事件は、「復讐」という負のスパイラルを生み出している。かつて感じた劣等感というのは、人間にモチベーションを与えてくれる時もあるが、同時に人をあらぬ方向へと導いてしまうこともある。「先生」の言う「残酷な復讐」も、テロのような望まれない人間の暴走を指しているであろう。

「こころ」は、その根幹に「信用」という問題が存在する。目まぐるしく動き、変化していく時代において、次第に薄れ失われていく人と人との間の「信用」を、漱石は問い直したかったのではないか。目の前の損益に捉われて、自らの行動の倫理を無視するという、競争が生んでしまった悲劇を漱石は前の一文で象徴しているのである。

そういった意味で、「私」は「先生」に絶大な信頼と尊敬を寄せ  
ていながら、「先生」が「私」に対して自らの過去や本性を明かそ  
うとしないのは、やはり「信用」の問題が関わっているのではない  
か。「先生」が世間や人間に無関心であるのは、淋しさが所以であ  
るといふより、薄情で人間味を失った世間に対する諦観の表れでは  
ないか。「かつてはその人の膝の前に跪ぎたという記憶が、今度  
はその人の頭の上に足を載せさせようとする」という一文に込めら  
れた漱石の、世間や人間に対する見方は、どこか悲壮感のただよう  
ものである。

## 《高校生の部》

佳作

### 犠牲としての淋しみ

東京学芸大学附属国際中等教育学校 2年

金沢 萌果

作品名『こころ』

選んだ一行

自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その  
犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならない  
でしょう。

この一文が私の心に留まった理由は、単純に意味がわからなかつたからだ。でもそれだけでなく、この一文を無視することを許さない心を掴む「何か」を感じた。その「何か」の正体を探るべく、私はこの本を読み進めた。しかし、結局先生が何を意図していたのか理解できないままだった。

「何か」の正体を知るためにはまず、先生のいう「自由と独立と己れとに充ちた現代」が何を指すのかを理解する必要があると思っ  
た。先生が生きていたのは明治末期の、個人主義の思想が取り入れ

られた時代だ。個人の自由や考えが認められるようになったという時代背景を知ると、「自由と独立と己れとに充ちた現代」はその新しい時代を指していると思われる。では近代化が進むことで味わわなくてはならない淋しみとは何なのだろうか。

この一文が出た会話で先生はKのことを思い浮かべていたため、先生のいう淋しみはKとの間にあった出来事と、文の前半で触れられた個人主義と関連しているはずだ。よく考えてみると、先生がKに対して取った行動は個人主義と結びつく。先生はお嬢さんに対するKの気持ちを知らないながら、自分の意思を優先しKを出し抜いた。その後Kは自殺してしまい、先生は大きな淋しみを味わった。もちろん、それは単に友人が死んだことから来る感情ではない。個人の自由が認められることで皆が必ず味わわなくてはならない淋しみ、つまり互いの間で利害の衝突が起きたり、考えを認め合えなくなってしまうことだ。先生が自分の利益やお嬢さんに対する感情を押し通した先にあったのは、幸福や勝利などではなく、後悔と孤独だった。この経験を通して先生は自分の自由が許される犠牲として、今までは感じることもなかった淋しさを一生背負うことを実感したのだと思う。

私をこの一文に惹きつけた「何か」の正体は、この淋しさだということに気づいた。しかし、私が時代背景の情報なしでこの文の意味がわからなかったのは、「自由と独立と己れとに充ちた現代」やその犠牲として「淋しみを味わわなくてはならない」ことは今や当

たり前になり、私たちが自由を得た犠牲として淋しみを味わっていることにまったく気づいていないからであったと思う。それでも自覚していない淋しさと、この一文に表れている淋しさには、相通じるものがあつたのではないかと感じる。意味を理解する前にすでに私の心を掴み、知らないうちに共感させてしまうこの一文にとても心を揺さぶられた。「こころ」が長年に渡って読み続けられている理由も、多くの読者が自分の心にある淋しみに密かに気づかされ、読み終わって感じる漠然とした「何か」に強く共鳴するからだと感じた。

私たちの持つ自由はあたりまえではない。私たち自身が淋しみを味わうことで払う犠牲の上に成り立っている。「こころ」は、そんな現代に生きる私たちの払拭できない淋しみを共有できる心の拠り所となっているのだ。

## 罪悪と信用

鎌倉女子大学高等部 2年

今井 智優

作品名『こころ』

選んだ一行

私は自分自身さえ信用していません。

幼い頃は難しく、半ばで読破を諦めてしまったその本は茶色いページも古本の匂いも昔と何ら変わらずそこに在った。懐かしさに読み進める。途中、「先生」が零した「私は自分自身さえ信用していませんのです」という一文が何故かすとんと心の奥に落ちていく感覚がした。それは「先生」が「私」に恋が罪悪であると投げかけた後、どういう意味かと食い下がる私に向かって放った言葉だった。

自分自身さえ信用していない、という言葉は随分と厭世的な感情のように思える。しかし、それが私の心に沁みたのは己の身の内にもそういう感情があるからだろう。混沌とした社会の中で自我の保ち方や自分の輪郭が分からなくなってしまふ。それはある意味、人

間として至極当然の心の動きではないだろうか。人や他人を信用するのは難しい。人が日々その心との折り合いをつけて大衆に迎合する中で、「先生」の一言は清々しくすらある。

けれど彼は「私」に手紙を残し、自分の人生を読んでもらうことで遣した。それは、大いなるエゴでは無かろうか。「私」には他者を信用できないと言っておきながら、今更になって「私」を「真面目だ」と評し何かを残そうとするなんて。随分と利己主義的であるように思える。

しかし、読み進めるうちにそれは「先生」にとって自分を最期に取り戻す必要なプロセスだったのではないかと感じるようになった。欲求をぶつけ合い、利己的な恋愛の末に「K」を失い、時代の変遷の中で自分の心に懐疑の目を向け、自らの恋を罪悪とまで言い、自分にとって大切なものを失った「先生」がようやく自分自身を掻き集めその自我を護ったのだ。私はそれを淋しく思いながら美しい、と思った。

明治から大正へ移りゆく激動の世間と前途茫洋な現代社会は似ている。誰もが自分自身さえ信用できず、杓子定規は歪んで正しさや自我があやふやになっていく。「先生」は信用することが出来ない、と言いながらも「私」に手紙を書くことで失われたものを確に取り戻したのだと私は思う。自分の罪悪、つまりはエゴと向き合い、何を正義とし何を悪としてその裁きを下すのか。それを自分と他者への信用を経て見つけていくことが、これからの社会で私を含めた全

ての人に求められていくものだろう。人は良くも悪くもその心でしか物事を測れない。何を信じて従うべきか、というその問はとても難解だ。けれど、現代社会の生存者になるためには、自分の中の罪悪と向きあってそれを受けとめる己の心を信じなくてはならない。繊細で傷ついた「先生」のところに触れたこの夏、私は少しでも自分を信じてみたいと思った。自分が内包する罪悪と向き合ったその時、初めて私は私になるのであると思うのだ。

## 《高校生の部》

佳作

## 導火線の意味

北鎌倉女子学園高等学校 2年

岩木 瑞歩

作品名『こころ』

選んだ一行

私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思いましたが、

私が夏目漱石の「こころ」という作品を読んで、心に深く残った

一行は「私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思いましたが」という一行です。私がこの一行を選んだ理由はお嬢さんとの結婚による幸せとその裏にある、親友Kが自殺してしまった原因は自分にあるという事実に対する複雑な感情が分かりやすく表現されているからです。特にこれから始まる奥さん（お嬢さん）との今後の日常を導火線にたとえているのが、いっ感情が爆発してしまうか分からない危うさを表現しているというのが、作品を読み切った後に、「ああなるほどな。」と思わせるところがありました。

お嬢さんと先生の結婚は、何も知らない人から見れば、彼らの将来は幸福に満ちた明るい生活が待っているだろうと誰もがそう思うと思います。しかし、幼馴染で親友のKが死んでしまった理由がこれからの奥さんとの生活は、常にKの自殺に対する罪悪感を目の前に突きつけられるようで、自分のしでかしてしまったことが取り返しのつかないことに繋がったと日々、責められているように感じてしまうと思えました。もし奥さんにKが自殺してしまった理由を伝えたら、許してくれるに違いないと思っても言うにも言えず、ずっと好きだったお嬢さんとの結婚を心から幸福に思えない先生の苦しみを考えるとても胸が痛くなりました。

そして苦しい思いをするのは先生だけでなく、奥さんもまた、先生が何に悩んでいるのか分からず、もどかしい思いをします。常に

自分の側にいる好きな人が何かに悩んで、突然、よく本を読むようになったり、酒を浴びるように飲んだりしているのを見ている奥さんの気持ちになると、読んでいて悲しいのと同時に苦しい気持ちにもなりました。奥さんは「何故そんなに悩んでいるのか」を先生に聞いてみても満足のいく答えはもらえないし、先生本人もその質問に容易に答えることができず悩みます。こうしたやり取りや、奥さんの存在は、先生の心を追い詰めてしまって、とうとう導火線が切れて、爆発してしまい、先生は親友のKの後を追うようにして、自殺を選んでしまったのだと思いました。私はまさか先生が自殺を選んでしまうとは思っていなかったのが驚きましたが、導火線という言葉を使った理由は、「爆発＝先生の自殺の決心」に結びつけるためだったのではないかと思いました。

## 《高校生の部》

佳作

## 生と死

長野清泉女学院高等学校 2年

望月 菜央

作品名『思い出す事など』

選んだ一行

生き延びた自分だけを頭に置かずに、命の綱を踏み外した人の有様も思い浮かべて、幸福な自分と照し合せて見ないと、わがありがたさも分からない、人の気の毒さも分からない。

この一文は、胃潰瘍にかかり修善寺で療養中に大吐血をし生命の危機に立たされた漱石と同時に違う土地で容態が悪くなった修善寺の院長に対しての言葉である。のちに、この院長は漱石よりも先に亡くなってしまふ。

この随筆に書かれている漱石の世界観は、どれだけ「死」というものが近くにあったとしても自分自身では意識することができず、それでも死にたくないと思ってしまう「死」に対する人間の感情や

その感情から起きる欲というものを学んだ気がする。

「死」とは対称的な「生きる」という言葉についても漱石は教えてくれた。大病を患い自分の体のことで精一杯のはずだが、漱石は療養中に世話になった医者や看護師、友人、家族、知人、自分の弟子たちに対する感謝を忘れなかった。生命に対する感謝、自然と食事に対する感謝が文中にあふれている。そのような文からは、心の穏やかさを感じることで私自身も目まぐるしい日々から少し解放されたような気になった。

私は、漱石のように感謝を口にしてしているだろうか。今の自分は生きていくことがあたりまえのようになっていくが、いつ死んだっておかしくない世界に生きていることには違いない。命の危機に立たされたからこそ感じる生きていることのありがたさから出る感謝を私も、見習わなくてはいけないと思う。感謝というのは、物で表現することもできるが、やはり言葉で伝えることが一番だと改めて感じることができた。

この随筆は主に漱石自身が経験した臨床体験で「死」について書き表しているが、読み進めていくうちにまだ遠い存在だと思っていた「死」が架空のものではなく身近なリアルなもののように感じた。私たちが人間であり続ける以上、何年後か何十年後いつかは誰もが体験すること。漱石の体験も、他人とは思えないような近さがある。そしてその事実を私たちは受け入れなければならぬのだ。

漱石は治療のため、修善寺に在る間に俳句や漢詩を作っては自身

の日記の中に書きつけていた。俳句や漢詩からは言語感覚の秀逸さが読みとれる。また、死に直面したドフトエフスキーの恍惚状態をあげ、人々への感謝を述べている。自分を苦しめた病にさえも感謝し、今生きていることの喜びが素直に表現され、ひしひしと伝わってくる。そんな漱石の自らの経験を記した「思い出す事など」に出会い、私の「死」への考え方も少し変わったように感じる。

今、生命の危機に立たされている人や余命宣告された人、何も考えずただ呆然と生きている人、人間は様々な人がいるがその一人一人の一日の価値は全部一緒だ。もちろん私も。

16歳の夏、これから生きていくに大切なことを学んだ。一日の価値は皆一緒、その一日をより価値あるものにするのは他でもない、自分なのだ。

一人一人の「こころ」

広島県立海田高等学校 2年

山口 芽依

作品名『こころ』

選んだ一行

私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。なってくれますか。あなたははらの底から真面目ですか。

私が選んだ一行は「私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。あなたははらの底から真面目ですか。」という言葉である。なぜなら、人を疑いたくないのに、疑わずにはいられない、信じたくても信じることができないといった苦しみや孤独。そのような感情が一行だけでも伝わってくるからだ。また、先生が直接的に死なせたわけではないが、Kの自殺による罪悪感。親

から遺産を受け取るが、祖父に騙され遺産を奪われるといったことから、人を信用することができなくなる先生の気持ちがよく理解できる。

選んだ一行の最後にある、あなたははらの底から真面目ですか。という問いに私は少しとまどった。この作品を読んで人間は誰もが善人にも悪人にもなりえるということを改めて感じ、人間にはいろんな「心」が存在するのではないかと思ったからだ。

先生のように「嫉妬」という感情からあせりKに伝えずに結婚話を進めていたり、反対にKのように先生のことを考えずに自分の感情だけで行動している。そのような人間の持つ「こころ」には醜いものもあるということを知った。そこからはらの底から真面目な人間はいないのではないかと私は思う。

先生は他の人だけでなく、自分も信じられなくなってしまった。先生は友人Kを死に追いつめるといって、確かに取り返しのつかないことをしてしまった。法で裁かれるものでないからこそ、孤独と罪悪感を一生感じて生きていかなくはないかと思った。

しかし私は自分を死に追いやるほど思い詰める先生は、正直で心の優しい人だと思う。また先生の選んだ生き方は厳しく、自分を否定し過ぎだと思える。

私はこの一行から、人を信じること・信じてもらえることのすごさを知った。人間の、「こころ」について深く考えたことはなかったが、こころを読んで、人間についてまた人間の心について深く考

えることができた。

だれもが善く生きられない葛藤に苦しむ。人には見えないところがある。だから人間はすごいと改めて感じる。それと同時にとても難しい生き物だなと思う。

後悔というものがここまで人を追い詰めるものだということを改めて感じた。後悔をせずに生きるとはとても難しいことだ。また少しの後悔は必要ではないかと思う。しかし取り返しのつかない後悔。これだけはきちんと冷静に考えることが大切だと感じる。

人の「こころ」は一人一人違い、推測することは難しい。だからこそ、これからは人間の「こころ」について考えながら生きていくと強く思った。

読書感想文 選んだ一行

惜しくも入賞を逸しましたが、最終審査候補となった作品と、その

「わたしの一行」を掲載します。

《中学生の部》

新宿区立牛込第二中学校 1年

作品名 『坊っちゃん』

題名 「坊っちゃん」を読んで心に残った一行

選んだ一行 あなたはまっすぐでよい御気性だ。

新宿区立牛込第三中学校 3年

作品名 『夢十夜』

題名 人生

選んだ一行 ところが—自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れた

刹那に、急に命が惜しくなった。

新宿区立四谷中学校 1年

作品名 『坊っちゃん』

題名 坊っちゃんへのあこがれ

選んだ一行 ささまらこれほどじぶんの悪いことを公に悪かったと

断言できるか。

新宿区立四谷中学校 1年

作品名 『坊っちゃん』

題名 信念は偉大でも、かっこよくもなくていい

選んだ一行 親譲りの無鉄砲で子供のときから損ばかりしている

新宿区立新宿中学校 1年

作品名 『三四郎』

題名 無限の可能性を追求する

選んだ一行 囚われちゃ駄目だ。いくら日本の為を思ったって鼻眞の引倒しになるばかりだ。

新宿区立新宿中学校 2年

作品名 『夢十夜』

題名 夢の世界に思い出をのせて

選んだ一行 百年、私の墓の傍に坐って待っていてください。きっと逢いに来ますから

学習院女子中等科 2年

作品名 『坊っちゃん』

題名 素直でいる事

選んだ一行 あやまるのもかりにあやまるので、勘弁するのもかり

に勘弁するのだと思ってればさしつかえない。

大妻中学校 1年

作品名『坊っちゃん』

題名 清への思い

選んだ一行 こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心は清に通じるに違いない。

大妻中学校 1年

作品名『坊っちゃん』

題名 坊ちゃんと清

選んだ一行 汽車がよっぽど動き出してから、もうだいじょうぶだろうと思って窓から首を出して、ふり向いたら、やっぱり立っていた。

大妻中学校 1年

作品名『坊っちゃん』

題名 “おもい”

選んだ一行 うとうとしたら清の夢を見た。

大妻中学校 1年

作品名『坊っちゃん』

題名 「勇氣」を持つこと

選んだ一行 出来ないのを出来ないと言うのに不思議があるもんか。

筑波大学附属中学校 1年

作品名『こころ』

題名 彩りのある人生

選んだ一行 私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかったから打ち明けなかったのです

筑波大学附属中学校 1年

作品名『こころ』

題名 心の内面の普遍性

選んだ一行 私がどの方面かへ切って出ようと思いつつや否や、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握りしめて少しも動けないようにするのです

日本女子大学附属中学校 1年

作品名『こころ』

題名 「こころ」と向き合う

選んだ一行 平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人に変わるんだから恐ろしいのです。油断が出来ないのです。

日本女子大学附属中学校 1年

作品名『坊っちゃん』

題名 自分の為に生きる

選んだ一行 人間は好き嫌で働くものだ。論法で働くものじゃない

《高校生の部》

学習院女子高等科 2年

作品名『こころ』

題名 先生と「私」

選んだ一行 私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの

顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、

あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

渋谷教育学園渋谷高等学校 2年

作品名『こころ』

題名 夏目漱石とシェイクスピア

選んだ一行 私は寂寞でした。どこからも切り離されて、世の中に

たった一人住んでいるような気のした事もよくありました。

渋谷教育学園渋谷高等学校 2年

作品名『こころ』

題名 先生からのメッセージ

選んだ一行 私は何千万という日本人のうちで、ただ貴方だけに、

私の過去を語りたいたいです。

光塩女子学院高等科 2年

作品名『硝子戸の中』

題名 「継続」とは

選んだ一行 凡てこれ等の人の心の奥には、私の知らない、又自分

達すら気の付かない、継続中のものがいくらでも潜んでいる

のではなからうか。

桐蔭学園高等学校 2年

作品名『こころ』

題名 時に逆らう正義

選んだ一行 私にはそれが明治が永久に去った報知の如く聞こえま

した。

鎌倉女子大学高等部 2年

作品名『こころ』

題名 近代化の代償

選んだ一行 自由と独立と己れとに充ちた現代に生まれた我々は、

その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならない

でしょう

北鎌倉女子学園高等学校 2年

作品名『こころ』

題名 人を信用すること

選んだ一行 あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。

開智学園中高一貫部 1年

作品名『こころ』

題名 「先生」の核心の外殻

選んだ一行 かつてはその人の膝の前に跪ずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとするのです。

開智学園中高一貫部 1年

作品名『こころ』

題名 夏目漱石の遺書

選んだ一行 あなたはそのたった一人になれますか。なってくれませんか。あなたははらの底から真面目ですか。

水城高等学校 1年

作品名『夢十夜』

題名 「夢十夜」を読んで

選んだ一行 百年はもう来ていたんだな

長野清泉女学院高等学校 1年

作品名『それから』

題名 働くことの意味

選んだ一行 働くのもいいが、働くなら生活以上の働きでなくちゃ名譽にならない

長野清泉女学院高等学校 2年

作品名『吾輩は猫である』

題名 午前四時の私と吾輩

選んだ一行 人間というものは、時間を潰すために強いて口を運動させて、可笑しくもないことを笑ったり、面白くもないことを嬉しがったりする外に能もない者だと思った。

長野清泉女学院高等学校 2年

作品名『こころ』

題名 信じる心

選んだ一行 私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思っている。

長野清泉女学院高等学校 2年

作品名『行人』

題名 誠実であるとは

選んだ一行 自分に誠実でないものは決して他人に誠実であり得ない。

広島県立海田高等学校 2年

作品名『こころ』

題名 「こころ」を読んで

選んだ一行 信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。  
人間全体を信用しないんです

掲載は順不同です。